

舞踊創作過程に関する研究

— 庄司 裕について —

○ 須 郷 京 子
石 黒 節 子

〔研究目的〕

創作過程に関する研究は、ワラス (Wallas) の段階説 — 1) 準備期 (preparation), 2) あたため期 (incubation), 3) 啓示期 (illumination), 4) 検証期 (verification) — が有名であるが、芸術の創作過程について、エーレンツヴァイク (Ehrenzweig) は、創詩的過程 (promagogic process) を想定している。本研究では、現在、モダンダンスの振付者として高名な庄司裕を対象として、舞踊創作過程を解明することを目的とする。

〔研究方法〕

(1) 1958年～1982年までの庄司裕に関する新聞記事、公演プログラム、本人の創作ノートを資料とし、創作の源泉から作品構想に至る過程の分析を行う。

(2) 振付から作品 (『冥府の使い』、『流れの中を』、『待つ』) が上演されるまでの過程の言語を、カセットテープレコーダー、VTRに録音録画し、その言語内容を分析する。

〔結果及び考察〕

庄司裕の創作過程に、無意識のイメージが意識化され、舞踊化されていく経過を見ることができた。そこで、以下の三段階に分類した。

(1) イメージの未分化期 <内的世界>

「舞踊の磁針は、故郷東北地方日本海の寂寥と人間の生活環境が自然条件よりきびしく左右された場合、言葉にならない言葉の表現に終始する場合が多かった」と庄司裕は語っているが、故郷である山形の風土で育かれたものが、未分化なイメージとして、深層に渾沌とした状態にあり、創作に影響を及ぼしていると言えよう。

画家を志した経歴から、表現への欲求が強いことが伺える。

読書、レコード・映画・劇・美術鑑賞などによる感動の享受が堆積され、浮動のイメージを形成していると見られる。文化庁在外研修員として渡米中、「イギリスから来演のシェークスピアの『真夏の夜の夢』を観た夜は一睡もできないほどの感激でした。」と手紙で伝えているが、後に、『恋人たち』— 真夏の夜の夢より — を生むことになる。

「現代社会が持つ矛盾とそこにはさまれて苦しむ人間を追求していきたい。」と語っているが、社会を構成する人間達の暗い微妙な情念、不条理へのもどかしさが、燠となって常にくすぶっていると考えられる。

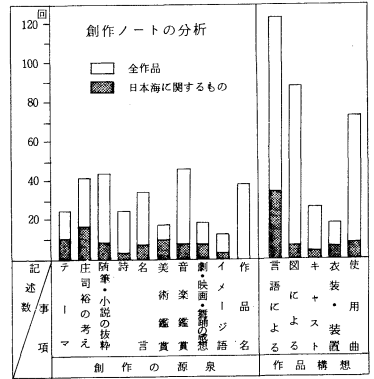
以上の様な、未分化なイメージが刺激されたとき、

創作意欲が高揚されている。例えば、『日本海』の創作に当たっては、「大変創作意欲をかりたて、力付けられたショパンの夜想曲の新しい発見、神戸の須磨寺に一千年も続く一絃琴との出会い」と語っているように、音楽が、創作の刺激となっている。

(2) イメージの分化・収斂期 <創作ノート> 創作ノート

には、図に分類した事項が記されている。これらを、創作の源泉と考えられるものと作品構想に関するものに分類した。前者は、イメージの分化、後者は、イメージの収斂と考

えられる。前者では、庄司裕の考え、文学の抜粋、音楽鑑賞が多い。



「柳は泣いている」、「花そうび、……花はなく、あるのはいばらのみ」という言葉が繰り返し出現している。ということは、これらのイメージが、庄司裕の作品の基盤となっていると見られる。

(3) イメージの統合期 <振付>

庄司裕自身が、リズムを口ずさみながら動いてイメージを具現化しており、以前にレッスンで創られた動きが、振付に導入されている。これは、レッスンが単なる身体訓練だけでなく、常に新しいフレーズを創造していることに由来すると言えよう。動きとイメージの統合が伺える。

言語内容に、身体→動き→情調と、振付過程にに応じて、舞踊表現体としての動きへの改造を求める質的変化が認められる。

〔むすび〕

東北での生活体験で育かれたものが、庄司裕の創作の源流となり、現代社会の矛盾に突き当たりながら流れを大きくしている。これらが、エーレンツヴァイクのいう芸術家の無意識の大洋を形成し、未分化なイメージは、文学・音楽などの刺激によって分化・収斂され、創作ノートへの言語化、図示化がなされ、明確に意識されるようになる。自ら動きながら、イメージを外在化する動きの検証を行い、イメージの統合がはかられる。イメージの分化・収斂期のメモにある「柳は泣いている」、「花そうび……花はなく、あるのはいばらのみ」などの情調が、「奔放に」、「流して」などといった振付言語を媒介としてダンサーに内在化され、動きに表現される。